

「映文連アワード2025」受賞主要作品紹介

■最優秀作品賞（グランプリ）

SBCスペシャル 本田先生のこころ診察室～発達障害のこどもたち～
(50分)

製作：信越放送株式会社

ディレクター：宮川伊都子 カメラマン：丸山清寿 音声：富岡努 ナレーター：宮入千洋
プロデューサー：手塚孝典

【作品概要】信州大学医学部附属病院子どものこころ診療部。発達障害を専門に診る本田秀夫先生の診察室には、子どもたちがこころを吐き出しにやってくる。診察時間は、1人30分。長野市に住む大井さん兄弟は、2人とも発達障害と診断されているが、タイプや特徴のあらわれ方が違う。兄はASD・自閉スペクトラム症。弟はASDに加えADHD・注意欠如多動症。学校の成績は上位で口達者。その特性ゆえに、クラスメイトから「いじり」を受けることがあると訴える。発達障害の子どもたちの診察を通して、本田医師が考える未来とは？



【選考経緯】信州大学医学部附属病院子どものこころ診療部、発達障害を専門に診る本田秀夫先生の診察室に通ってくる発達障害と診断される子どもとその親取材し、発達障害とは何か、どう対応すべきかを描く。一般的に発達障害とは、発達特性によって生活上の支障が起きること。発達障害を発達の「病的な遅れ」ではなく、「一種の多様性」と考えようという本田先生。番組では大井さん兄弟（陽介さんと勇人くん）を始め、10人余りの発達障害のケースを取り上げるが、「何か困っていることはない？」という先生の問いかけに子どもたちは率直にそれぞれ心境を吐露する。本田先生のざっくばらんな対応は、子どもから有りの儘の声を引き出し、その診察の様子は観るものを引きつける。カメラは先生の診察と活動を追い、発達障害とは何かを知らせ、どうすれば発達障害の特性が生きる上で「障害」にならずにすむのか、親や周囲はどう対応していけばよいかを考えさせる、重いテーマだが、軽やかで有用なドキュメンタリーとなっている。

■文部科学大臣賞

だから、私はここで生きる～福島・大熊町 移住した若者たち～ (59分)

製作：テレコムスタッフ株式会社/ 株式会社NHKエデュケーショナル

クライアント：日本放送協会

プロデューサー：横山敏子、田波宏視、吉村恵美 ディレクター：宮部洋二郎 取材ディレクター：田原純、三ヶ尻萌恵 アシスタント・ディレクター：橋脇ななみ 撮影：辻智彦
編集：加藤ひとみ 効果：伊藤豊

【作品概要】東京から移住してきた若い夫婦、フルーツ王国・大熊町を復活させようと和歌山からきたキウイ栽培の23歳の青年、町で唯一の本屋を営む地元出身の詩人…。様々な人生を背景に、この地で未来を築こうとする若者の姿をドキュメント。一方で、行政の取り組みや展望、未だに地元に戻ってこられない人々たちにもふれ、様々な人間模様を群像で描きながら、“町の再生”、その現実をリアルに捉えていく。



【選考経緯】東日本大震災の原発事故によって、町全域が帰宅困難地域となった福島県大熊町。2019年に一部で避難指示が解除されたが、住民はほとんど戻らなかった。しかし、町に移住定住センターができると行政の支援もあって、予想以上に若者たちの移住が増える。様々なきっかけで町に移住してきた20代から30代の若者4人（廃炉作業に携わる近藤さん、元パティシェの池田さん、キウイ復活に挑む原口さん、青空本屋を営む武内さん）を通して、大熊町の今を見つめたドキュメントである。なぜ若者たちは、“原発の町”を選んだのか？彼らの仕事や活動、人々との関わりを通して、町への思いや葛藤が描かれる。さらに大熊町を去らざるを得なかった元住民や震災体験を語り継ごうとする人にも取材を重ね、重層的に課題を浮き彫りにしていく。移住してきた若者たちは、原発事故で一旦住民がゼロになったこの地を、むしろ新しいことを始める場として捉え、新たな挑戦をしていこうとしている。行政の取り組み、若者たちによる新たなコミュニティ作りに“町の再生”、希望を感じさせる前向きになれるドキュメンタリー作品である。

■経済産業大臣賞

【MAZDAドキュメンタリー】RX-7と過ごした25年間、最後の3日間 ～クルマが残してくれたもの～ (9分46秒)

製作：LUCK株式会社

クライアント：マツダ株式会社

プランナー・ディレクター・編集：小川凜一（LUCK株式会社） プロデューサー・SNSコンテンツ

デザイナー：砂田智香（LUCK株式会社） 撮影：松栄憲太（株式会社アマナ） 録音・MA：小野

幹和 グレーディング：神林輝

【作品概要】長崎在住の西本尚子さん（79歳）は、25年間愛車RX-7と共に過ごしてきました。80歳を迎えるにあたり、免許を返納し愛車との別れを決意。新たな引き取り手を探す中で、マツダがその意思を受け継ぎ、RX-7はマツダの広報車として生まれ変わることになりました。別れの3日間を記録した本作では、西本さんのクルマへの深い愛情と、クルマという存在が人生を豊かにする存在であることを描いています。



【選考経緯】ロータリーエンジンを搭載したマツダRX-7は、2002年自動車排出ガス規制を受けて生産を終了したが、ポルシェにも比類される、高性能のスポーツカーである。21歳で免許を取得した時から車を運転している西本尚さんは、55歳でRX-7と出会い、25年間乗り続け、80歳を前に愛車を手放すことを決意する。RX-7の魅力や乗り心地について嬉々として語る西本さん。西本さんにとってRX-7は単なる移動手段でなく、いつも一緒にいる“友達”のような存在であった。RX-7への愛と感謝の気持ちを語る西本さんの言葉はナチュラルで心に響く。このような語り部を見つけたこと自体“奇跡”と言えるのではなかろうか。幸いにも、RX-7はマツダの広報車として生まれ変わることになり、「何も悔いはないです」と、きっぱりと車を手放す西本さんの思い切りの良さは、高齢者の免許返納の好ましい形を示唆しているとも言えよう。「前向きに今日を生きる人の輪を広げる」という社の理念と合致し、ユーザーを大切する会社というイメージを幅広い世代にアピールする、好感度の高い企業映像である。

■優秀作品賞（準グランプリ）

年末年始いるいる劇場 by シソンヌ （4分19秒）

製作：太陽企画株式会社／株式会社電通

クライアント：株式会社ユニクロ

プロデューサー：永澤秀勝、森重智子 PM：小倉颯、堀井開 ディレクター：池田萌 カメラ：重田純輝 ライト：大堀治輝 美術：白石昭浩 スタイリスト：片貝俊 ヘアメイク：根本茉波 料理スタイリスト：永作真穂 同録/ミキサー：太斉唯夫 コーディネーター：藤川健太郎
キャスティング：磯貝順子 音楽：吉川太郎 SE：中野豊久 出演：シソンヌ ナレーター：天利英里子 仮編集：板橋知也 本編集：帆足誠 カラリスト：高山春彦

【作品概要】「地元のコンビニに行くとき、服装油断しがち」や「義実家で食べすぎて、こっそりウエストゆるめがち」など、ちょっと恥ずかしいけど自分もやってる…という絶妙な共感ポイントを刺激する「あるある」をCMにした。また、CMの中では「こんな人いるいる！」を描写することに注力し、商品に言及しないことで、年末年始の余暇に楽しめるコンテンツとして受け取ってもらうことを意識した。



【選考経緯】ユニクロの年末年始に流すWebCMであるが、お笑いコンビ・シソンヌを起用し、服装や暮らしにまつわる生活実感を伴ったあるあるの事例を展開する。シソンヌのショートコントが抜群に面白く、いるよな、そんな人、些か恥ずかしいけれど自分もやってたなど気づかせてくれ、年末年始のちょっとした息抜き、風物詩のような共感を呼ぶコンテンツとなっている。商品を前面に出すのではないが、なぜユニクロのライフウエアが必要とされるのかよく伝わる。企業との結び付け方がうまく、非常に完成度の高いCMである。

■優秀作品賞（準グランプリ）

あなたのいる庭 （35分52秒）

製作：東映株式会社

クライアント：兵庫県／兵庫県人権啓発協会

プロデューサー：福島宏樹、岩川日和 キャスティングプロデューサー：福岡康裕 脚本：山上梨香 監督：田口仁

【作品概要】阪神淡路大震災で夫と娘を亡くし、心を閉ざして生きる和佳菜は、児童養護施設で暮らす少女・実結と出会う。和佳菜が庭で育てているトマトを通じて交流を始めた二人。実結は施設で暮らしていることで受ける偏見や大学進学への夢を、和佳菜は震災の辛い記憶を打ち明け合い、二人は心を通わせていく。そんなある日、和佳菜は、久々に母親と面会した実結が、施設に帰ってこないという連絡を受ける。



【選考経緯】様々な理由で親と暮らせず、児童養護施設などで暮らしている子どもや施設から離れた子どもや若者は、社会からの偏見に晒されたり、進学や就職などで困難に直面しがち。本作では、そんな児童養護施設の子供と阪神淡路大震災で家族を失った女性との交流を描き、「こどもの人権」を考えさせる学習教材となっている。長年タグを組んできた脚本家・監督の名コンビによる、手堅い構成と演出に加え、キャスティング力が活かされた南野陽子を始めとする出演者の演技に見応えがあり、すんなりと引き込まれるドラマになっている。実の母親に会って荒れる少女・実結の様子はやや唐突な感じもあったが、地域の中で子どもたちを育ていこうという、メッセージが伝わる優れた学習教材映像になっている。

■優秀作品賞（準グランプリ）

狐の嫁入り （25分）

製作：恵水流生

プロデューサー・脚本・撮影・編集・監督：恵水流生 音楽：小野川浩幸 編集：今井大介
録音：竹内勝一郎

【作品概要】古来より日本には、晴れた日に雨が降ると狐の嫁入りが現れるという伝説がある。見ると恐ろしいことが起こると恐れられ、決して見てはいけないと語り継がれてきた。ある晴れた日、三郎と姉がかくれんぼをしていると雨が降り出し、二人はススキの原で不思議な光景を目撃する。日本の伝承「狐の嫁入り」を題材に、村社会の閉鎖性や差別意識、未知への恐れを描く。



【選考経緯】日本の昔話をもとに人種問題をテーマにした作品。G・ガルシア＝マルケス『百年の孤独』と寺山修司の短歌を想起させた。冒頭、少年が姉とかくれんぼする始まりは、寺山の短歌「かくれんぼ 鬼のままにて老いたれば 誰をさがしにくる村祭」を連想させる。「もういいかい?」「まあだだよ」を繰り返し、「もういいよ」と言われないまま、いつの間にか人は老いていく。そして「もういいよ」と言われた瞬間、時は「現代」になる。異端なものとの交流、偏見や差別の問題を内包しつつ、能舞台にフラメンコを入れてみたり、ギターと三味線を同列に並べたり、対立するものを混在させ、巧妙に練り上げて作っている。伝統美を感じさせる幻想的な絵作りでクリエイティビティの高い作品として評価された。